

令和8年度 学校経営方針

羽曳野市立高鷲南中学校
校長 松尾 裕文

1. 本校の教育

◇高鷲南中学校区のめざす子ども像

『素直で思いやりのある心と のびのびとすこやかな体で 自ら行動できる子ども』

◇教育目標スローガン

『だれもかれもが 互いに認め合い 力いっぱい のびのびと生活できる 学校にしよう』

◇教育目標

個人の尊厳を重んじ、いっさいの差別を許さず、真理と平和を希求し、民主国家、社会の建設にすすんで参加できる人間の育成をめざす。

1. 人権尊重の精神に徹し、差別やいじめを許さない生徒を育てる。
2. 集団づくりの中で正しい権利の主張ができ、自分の言動に責任の持てる生徒を育てる。
3. 集団の一員として規則を守る礼儀正しい生徒を育てる。
4. 健康で、情操豊かで、創造力に富む生徒を育てる。
5. 未来への希望をもち、無限の可能性を信じ、個性を生かして、自主的に学習できる生徒を育てる。
6. 勤労を尊び、実践力を身につけ、たくましく生きていける生徒を育てる。

2. 学校経営方針

「よき集団の中で、よき個は育つ」

生徒・教職員一人ひとりが、自他の命を尊び、生かされていることへの感謝を忘れない。人権を大切にしながら個々の違いを認め合い、心理的安全性の高い集団の中で、自律的に生活することを意識する。本校すべての生徒・教職員集団で以下の集団づくりに取り組み、「ウェルビーイング(心身の幸せ)」を実感できる学校をめざす。

- ① **対話と合意形成**: 互いに尊重し、「本音」で語り合いながら、多様な意見を調整し、共に納得解を見つけ出せる集団づくり。
- ② **主体性と貢献**: 一人ひとりが組織(学級・学年・クラブ・職員)の一員として、自ら役割を見つけ、責任を持って果たすことで互いを高め合う集団づくり。
- ③ **包摂と支え合い**: 個性を認め合い、それぞれの強みを活かし、足りない所を補い合いながら「誰一人取り残さない」集団づくり。
- ④ **命の尊厳と感謝**: 命の尊さを考え、自分や周りの人たちの命を大切にし、豊かな感性で他者を思いやれる集団づくり。
- ⑤ **安全・安心な風土**: 気配りと配慮に満ち、失敗を恐れず挑戦でき、困った時にはいつでも「助けて」と言える優しさあふれる集団づくり。
- ⑥ **自己管理と調律**: 「食事・睡眠・運動」と「デジタルの適切な活用」を自ら律することが、学びの質と心身の健康につながることを理解し、実践できる集団づくり。

3. 令和8年度の具体的取組みについて

(1) 安心・安全に楽しく通える魅力ある学校づくりの推進

- ・「居場所」と「絆」の強化：自己肯定感・有用感を高める発達支持的な生徒指導を推進し、集団の中における生徒一人ひとりの居場所の確保に努め、いじめ・不登校の未然防止を図る。
- ・組織的な課題解決：いじめ・不登校や虐待等の課題に対し、校内支援チームと関係諸機関（SC・SSW等）が連携し、対応チャートに基づき、迅速かつ多角的な支援を展開する。
- ・多様性の尊重：ルーツ、ジェンダー、障がいの有無など、多様な背景を理解し合う学習を充実させ、誰もが「自分らしく」いられる集団づくりを推進する。
- ・インクルーシブ教育の推進：通級指導、日本語指導、校内教育支援教室等、個に応じた支援体制の充実を図り、すべての生徒が安心して生活できる環境づくりを推進する。通常の学級においてもユニバーサルデザインの視点を取り入れた環境整備と指導の充実を図る。
- ・防災・危機管理の高度化：災害予測が困難な時代背景を踏まえ、地域・専門機関と連携した実践的な訓練を通じ、自らの命を守り抜く判断力を養う。

(2) 授業改善、GIGA 2.0 活用による成長を実感できる学びの創造

- ・「問い」と「協働」のある授業：「参加・学び合い・表現」を軸に、生徒が課題意識を持って主体的に取り組める授業改善を推進し、「わかる」「できる」の実感を保証する。
- ・ICT活用の高度化(GIGA 2.0)：端末更新に合わせ、AIドリル等の個別最適な学びにつながる効果的活用を図るとともに、生成AI等の新たな技術を正しく使いこなし、情報の真偽を見極める力や、情報モラルを身につける指導を充実させる。
- ・自ら学ぶ力の育成：家庭での学習習慣の定着に向けて、学びに対する興味・関心や意欲を高める学習課題の工夫改善を図る。
- ・社会とつながるキャリア教育：教科教育、キャリア教育において、ゲストティーチャー等を活用し、生徒が将来の夢や目標を育めるような当事者との出会いや学びの場を積極的に創出する。

(3) 生徒の健やかな成長を促す取組みの推進

- ・デジタル・ウェルビーイングの確立：「早寝早起き朝ごはん」に加え、スマホ・ゲームの使用を自らコントロールする実践力の育成を図り、家庭学習と健康の両立を支援する。
- ・食育の深化(全員喫食の定着・発展)：全員喫食2年目として、給食を「生きた教材」として活用し、栄養学、地産地消、SDGs(食品ロス削減)など各教科と連携した食育の取組みを充実させるとともに、食物アレルギー事故防止対策など安全な実施に努める。
- ・「中学校区の一体化」：読書月間、あいさつ運動、合同研修、家庭学習期間の設定など「めざす子ども像」を共有した幼小中連携の活性化を図る。
- ・地域共創の推進：生徒が地域とのつながりを実感できるよう、地域諸団体と連携した活動の推進や学校から地域への積極的な情報発信に努める。

(4) 教職員の働き方改革とウェルビーイングの推進

- ・ 教職員のウェルビーイング:「時間外勤務月平均5時間以上の削減」を心身ともに健康な状態で生徒と向き合うための「投資」と位置づけ、教育の質を維持・向上につなげる。
- ・ 業務効率化の推進:下表のように削減・再編すべき業務の見直しを図り効率化を推進する。

削減・再編すべき業務 (アナログ・慣例)	デジタル化・最適化すべきプロセス
過剰な報告書類、形式的な定例会議	校務支援システムによるデータ一元管理と情報共有の迅速化
重複する連絡業務、紙媒体の資料作成	デジタルツールの活用によるペーパーレス化と会議の短縮
実情に合わない複雑な校務分掌	業務実態に即した効率的な分掌組織への再編

4. 令和8年度に教職員で共有する3つの行動指針

令和8年度の学校経営を進めるうえで、教職員の行動指針として3つのキーワードを掲げています。これらは、生徒の学びと成長を支えるための、私たち自身の姿勢を示すものです。「チーム南中」として、一人ひとりが抱える課題を全員で支え、仲間の喜びを自分のことのように喜べる——そんな組織であり続けたいと考えています。

・「対話」 生徒との対話、同僚との対話

指示や伝達だけで終わらず、相手の言葉に耳を傾ける時間を大切にします。教室が生徒にとって、職員室が教職員にとって「相談しやすく、安心できる場所」であることは、質の高い教育につながります。対話を通して互いを理解し合う文化を育みます。

・「余白」 心のゆとりが生む、教育の質

ICT を最大限に活用し、業務の効率化をさらに進めることで、心のゆとり=「余白」を生み出します。勇気を持って「やらなくてもよいこと」を見極め、生徒やご家庭と向き合う時間、そして教職員自身が学びを深めたり、休息やリフレッシュをしたりする時間を確保することも、教育の質を高めるうえで欠かせません。

・「挑戦」 失敗を恐れない姿勢

生徒に挑戦を求めるならば、まず大人が挑戦する姿勢を示すことが大切です。新しい授業実践、新しい行事の在り方など、まずは「やってみる」。失敗したとしても、そこから学べることは多くあります。挑戦を歓迎し、学びに変える組織文化を育てます。